

「あなたは、わたしに従いなさい」

ヨハネの福音書 21 : 1 - 23

ティベリア湖、すなわちガリラヤ湖での出来事です。

弟子たちはガリラヤに帰ってきていました。復活したイエス様がマグダラのマリアにこのように言っていたからです。

「わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えます」(マタイ 28:10)。

そこで、イエス様の約束の通り、イエス様と再会することになるのです。しかし、弟子たちはすぐにはイエス様だとは分かりませんでした。

イエス様から離れて、普段の生活をして、まさかイエス様が今ここに来られるとは思っていなかったのかもしれませんが。あるいは、弟子たちそれぞれに複雑な思いがあって、心が曇り、イエス様が見えなかったのかもしれませんが。

なぜ、イエス様は、弟子たちをガリラヤに向かわせたのでしょうか。なぜ、そこで弟子たちと会おうとされたのでしょうか。

ガリラヤは弟子たちにとって特別な場所でした。新しい歩みが始まった場所がガリラヤでした。ガリラヤから、弟子たちのイエス様と共に生きる人生が始まったのでした。

それから3年後、イエス様の十字架と復活という出来事を経験し、弟子たちはイエス様から離れていました。そして、恐れと不安の中で、自分たちは一体どうなっているんだろうかと、これからどうしたら良いんだろうかと、弟子たちそれぞれが、色々なことを考えつつも、ガリラヤでの元の生活に戻っていたのです。

そのような中、ペテロは「漁に行く」と言いだします。不安や悩みを紛らわすためか、いつもの生活、いつもの仕事をして平静を保とうとしたのか、これから再び漁師として生きていくことを考えたのか、とにかく漁に行くことにするのです。

そんなペテロに、「私たちも一緒に行く」と、他の弟子たちがついていきます。

自分たちは、元々漁師だった。イエス様の弟子としては上手くいかなかったが、漁の腕はなまっていないだろうと、自分たちの力に、少なからず期待を持っていたことでしょう。

しかし、夜通し漁をしても、何も捕ることができませんでした。漁師であったにも関わらず、1匹も捕れなかったのです。

少しでも魚が捕れれば慰めになったことでしょう。しかしむしろ、落胆することになりました。イエス様の弟子としても上手くいかない。漁もまともにできない。「俺たちは何もできないではないか」、「どうしたらいいんだ」と落ち込む弟子たちがいました。

その時です。復活されたイエス様が現われるのです。

「夜が明け始めていたころ」ということで、ぼんやりとしていたのかもしれませんが。弟子たち自身がぼんやりしていたのかもしれませんが。弟子たちは、岸辺に立っておられるお方が、イエス様だと、誰も気がつきませんでした。

イエス様は弟子たちに語りかけられます。

「イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ、食べる魚がありませんね。」彼らは答えた。「ありません。」(21章5節)

イエス様は弟子たちのことを心配してくださっていたのか。「子どもたちよ、食べる魚がありませんね。」と問いかけます。弟子たちは、何も捕れなかったので、「ありません」と答えています。

せっかく漁をしたのに、漁師であったのに、何も捕れなかった。食べる物もない。それが弟子たちの現実でした。

そんな弟子たちに、イエス様は続けて語られます。

「イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れます。」そこで、彼らは網を打った。すると、おびただしい数の魚のために、もはや彼らには網を引き上げることができなかった。」(21章6節)

「舟の右側に網を打ちなさい」と言われました。しかも、「そうすれば捕れます」という約束までされたのです。

弟子たちはその約束を信じてか、とにかく、自分たちが今食べる分だけは捕りたいと思ったのか、イエス様が言われた通りにすると、網を引き上げることができないほどの、たくさんの魚が捕れたのです。

その瞬間、「イエスが愛された弟子」、すなわちヨハネが、ペテロに「主だ」と言いました。岸边に立つお方が、イエス様だと分かったのです。

弟子たちは、網にかかった大漁の魚を見て、以前にも同じようなことがあったと思い出したことでしょう。ルカの福音書 5 章にその出来事が記されています。ガリラヤ湖でのイエス様との最初の出会いです。その時イエス様は、ペテロの舟に乗り、「深みに漕ぎ出し、網を下して魚を捕りなさい」と言われます。この時もまた、夜通し働いても何一つ取れず、舟から下りて網を洗っていたのです。

「でも、おことばですので、網を下してみましょう。」と、そのとおりにすると、おびただしい数の魚が網に入り、網が破れそうになった、ということがありました。

そしてペテロは、イエス様の足もとにひれ伏して、「主よ私から離れてください。私は罪深い人間ですから」と言います。他の者たちも驚く中、イエス様はペテロに言うのです。

「恐れることはない、今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。」

そして、「彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った」とあります。

弟子たちはその出来事を思い出しました。ガリラヤ湖は弟子たちとイエス様の出会いの場所であり、弟子としてのスタート地点でありました。自分たちはこのところでイエス様の弟子になったんだ。そのことも思い出しつつ、再び、イエス様が漁をしている私たちのところに来てくださり、また大漁になったということに驚きながら、ここから新しい歩みが始まるのかと、期待をしたことでしょう。

最初の出会ってからイエス様と共に歩んだ 3 年間。色んなことがありました。特にその最後はイエス様が捕らえられ、十字架につけられ、弟子たちはイエス様から離れることになりました。これからどうなってしまうのだろうか。イエス様に導かれてきた弟子たちは、イエス様から離れて、迷っていました。

弟子たちは恐れを覚えるようになりました。ヨハネの福音書 20 章を見ると、部屋に隠れ、閉じこもり、戸に鍵をかけ、息をひそめて、身を寄せ合う弟子たちの姿が記されています。その弟子たちが隠れているところに、復活されたイエス様が現われ、励まされました。「平安」があるように。イエス様は弟子たちを恐れから解放しようと、もう一度立ち上がるようにとされるのですが、弟子たちはなかなか立ち上がるできません。

弟子たちの弱さであり、それは私たちの弱さでもあります。これまでも弟子たちはそうでした。イエス様が十字架と復活について話されても、理解することができませんでした。目をさまして、祈っているように言われても、眠り込んでしまう。「肉体は弱いのだ」とイエス様は言われました。私たちは弱いのです。

恐れ、落ち込み、うずくまり、暗くなり、力が無くなり、眠り込んで、弱ってしまう弟子たち、そして私たちです。私たちは無力なのです。イエス様が来て、助けてくださらなければ何もできないのです。

そんな弟子たちが、何とか、エルサレムからガリラヤにたどり着いたのです。でも漁をしてもなにも捕れない。弟子たちのみじめな姿がありました。

もし魚が少しでも捕れれば、弟子としては何もできなかったけれども、漁師としては何とかやっていけるかもしれないと、希望を持てたかもしれません。しかしそうではなく、またまた無力さを覚えることになりました。弟子としても、漁師としても、自分は一体何ができるのか。

そのようなときに、岸边にイエス様が現れて、「船の右側に網を打ちなさい」と言われ、大漁になったのです。「主だ、イエス様だ」。舟にいたペテロはすぐに上着をまとい、少しでも早く、岸边まで泳いでイエス様のもとに行きました。

他の弟子たちも、魚がたっぷりの網を引いて、舟で戻ってきます。

弟子たちが岸边にたどり着くと、イエス様が弟子たちのために朝食を用意してくださっていました。

「こうして彼らが陸地に上がると、そこには炭火がおこされていて、その上には魚があり、またパンがあるのが見えた。」(21 章 9 節)

イエス様は夜通し漁をして疲れ切って、空腹で、そして失望している弟子たちに、温かい食事を準備してくださったのです。

「イエスは来てパンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。」(21 章 13 節)

弟子たちは、最後の晩餐のイエス様の姿を思い起こしたことでしょう。「あの時のイエス様だ」、「変わらない同じイエス様だ」、「私たちを導き、教え、そして温かく愛してくださった、あのイエス様が今ここにおられる」と、感動したことでしょう。

私たちも、普段の生活の中で、イエス様から離れてしまうということがあります。そのようなときに、私たちの日常の生活のその場所にイエス様が来てくださり、その日常の生活のところから、私たちの人生はイエス様によって導かれていくのです。

私たちは迷いながら生きるのではなく、自分の力で労苦をして必要を満たすのではなく、イエス様が備えてくださっている恵みを受け取るのです。弟子たちがそうであったように、私たちは自分の力では何もできないのです。

食事を終えてから、イエス様はペテロに語りかけられます。弟子たちの中で特にペテロは、イエス様に対して複雑な思いを持っていたことでしょう。

十字架にかかれるイエス様を前にして、「私は、あの人を知らない」と3度もイエス様を否定していたからです。

自分はイエス様を裏切ってしまった。イエス様を知らないと言ってしまった。

イエス様から離れてしまった。そんな私をイエス様はどう思っているのだろうか。イエス様を悲しませてしまった。いや怒らせてしまった。もう自分はイエス様の弟子ではない。イエス様に何と言われるだろうか。そのように、色々なことを考えていたことでしょう。

そんなペテロに、イエス様は言われます。

「彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」ペテロは答えた。「はい、主よ。私があなたを愛していることは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの子羊を飼いなさい。」(21章15節)

「ヨハネの子シモン」とはペテロの元々の名前でした。イエス様に、岩という意味のペテロと呼ばれる前の名前です。イエス様はあえて、「シモン」と呼んだのです。あなたはわたしに「岩、ペテロ」と呼ばれるにふさわしい、信仰の土台があるのか。イエス様は問われるのです。

「あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか」

ペテロは恥かしくなったことでしょう。最後の晩餐の席で、他の弟子たちを押しつけて、「自分は、あなたのためならいのちも捨てます」と大言壮語してたからです。

にも関わらず、実際にはイエス様の十字架を前にして逃げ出してしまったのです。「他の弟子たちよりも自分はイエス様を愛している」、「他の弟子たちができなくとも自分はイエス様のためにいのちを捨てることができる」。そう言ったにも関わらず、他の弟子たちと同じように、いや他の弟子たちよりも、イエス様に対してひどいことをしてしまったのです。

イエス様に、「あなたは、わたしを愛していますか」そう問われた瞬間、ペテロは、自分の罪深さ、弱さ、恥ずかしさに胸が締め付けられたことでしょう。

自分は本当にだめな、みじめな人間だと、その場から逃げたくなるような、イエス様から離れたくなるような心境になったのではないのでしょうか。

しかしペテロは、今度は逃げまいと、本当は愛の無い自分を知りつつも、それでもイエス様を愛したいんだと、自分がどうしようもないからこそ、イエス様が必要なんだと、なんとか力を振り絞って、イエス様に答えます。

「はい、主よ。私があなたを愛していることは、あなたをご存じです。」

イエス様の弟子として、イエス様の愛に応えて、イエス様を愛し、そしてまた新しい歩みを始めたい。そんなペテロの思いがあったことだと思います。

自分はイエス様の弟子でありたい、何もできないけれども、イエス様が私を導き、用いてくださるならば、私にもできることがあると信じていたのです。

愛はないけれども、でも愛したい。力はないけれども、なんとか力を振り絞ってイエス様のそばにいたい。そんなペテロの姿が思い浮かんできます。

そして、その姿はペテロの姿であるだけでなく、私の姿でもあると思わされるのです。どうしようもないけれども、ひどい人間だけれども、罪深く、弱いけれども、でもイエス様を愛したい。イエス様と一緒にいたい。

どうしようもない自分だからこそ、イエス様が共にいてくださらなければ、何もできず、ただ恐れの中に閉じこもり、光も見えず、立ち上がることもできず、前に進むこともできない。だから、イエス様、赦してください、助けてください、力を与えてください、愛を教えてくださいと求めるのです。

そんな私をイエス様が愛し、赦し、招いてくださるのならば、その愛に応え、赦しを受け入れて、悔い改めて、またここから、新しい歩みを始めさせてくださいと、「イエス様を愛します、助けてください、用いてください、あなたが私を生かしてください」と、イエス様に答えるのです。

問いかけるイエス様の姿を見て、まなざしを見て、その声を聴いて、ペテロは「イエス様はこの裏切った私を今も変わらずに愛してくださっている」と確信したのでしょう。「イエス様は、私の苦しみ、悲しみ、その全てを知ってください」と安心したのでしょう。「それでいい、あなたは確かに罪深い、だからあなたは私を愛しなさい、私を愛するその愛は、私があなたに与えるのだ」とイエス様の赦しと救いの約束を受けたのでしょう。

ペテロはイエス様の愛に応答して「私はあなたを愛したい」と答えます。そのやり取りが3度続きます。3度目にペテロは「心を痛めた」とあります。

イエス様が3度も繰り返されたのは、「私が3度、『イエス様を知らない』と言ったからだ」とペテロが気づいたからです。

イエス様に自分の罪を明らかにされ、心を痛めるわけです。

しかし、ペテロは同時に、それでもイエス様が自分を愛してくださっていることを感じたことでしょう。そして、「自分の弱さ、罪を認め、イエス様を愛すると告白することによって、私は赦される」ということを確信したことでしょう。

「私はあなたを愛します」、「私はあなたを愛します」、「私はあなたを愛します」とイエス様に向かって、声を出して告白するたびに、ペテロは赦しを経験したのです。

イエス様を裏切ったとしても、悔い改めて、イエス様を愛したいと思う者を、イエス様はもう一度、弟子として、新たな歩みへと導きだしてくださるお方です。イエス様はペテロを過去の失敗と罪から回復させ、赦しを与え、再び弟子として立ち上がらせてくださり、弟子としての使命を与えられました。

イエス様は、3度、「あなたはわたしを愛していますか」と繰り返されるだけでなく、「私はあなたを愛します」と答えるペテロに対して、「わたしの小羊を飼いなさい」、「わたしの羊を牧しなさい」、「わたしの羊を飼いなさい」と繰り返されました。

赦しが与えられるだけではなく、赦しと共に、使命が与えられるのです。「私はあなたを赦す。あなたが私を愛するならば、私についてきなさい。私に従いなさい」と私たちはイエス様の愛のうちに新たな道へと導かれていくのです。

私たちを愛されるイエス様は、私たちの傷を洗い、罪を赦し、新しい使命を与えられるのです。

イエス様はペテロに言われました。「わたしに従いなさい」(19 節)

しかし、ペテロはこのとき、振り向いてヨハネを見ました。

「ペテロは彼を見て、「主よ、この人はどうなのですか」とイエスに言った。」(21 章 21 節)

ただイエス様を見ていたペテロがイエス様から目を離して、他の弟子に目を向けるのです。この人はどうなのだろうか。

私たちも、イエス様と語り合い、ただイエス様に目を向け、イエス様の声を聴き、イエス様の導きを求めている、ふとイエス様から目を離し、イエス様との親密な関係から離れて、周りの人を見てしまうことがあります。

あの人はどうなのだろうか。

「イエス様は、自分に対しては、このことを求めておられる。では、あの人には何を求めておられるのだろうか」。そして、「もしやあの人の方がイエス様に用いられるのではないだろうか」、あるいは「あの人はイエス様にちゃんと従っているのだろうか」、というように、自分はイエス様に従うと決心をしても、どうしても人と比べてしまう弱さが私たちにはあります。

イエス様はペテロに答えます。

「他の人の人生はあなたとどう関わるのか。他の人の人生はあなたに関係ないことではないか。なぜ気にしているのか。他の人を見るのではなく、あなたは私に従いなさい」

イエス様ははっきりと言われるのです。

「イエスはペテロに言われた。「わたしが来るときまで彼が生けるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」」(21 章 22 節)

「あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい」。

あなたはあなたの人生を生きなさい。あなたは私が導く人生を生きなさい。とペテロを励まされるのです。

人と比べて、何をするか、どこに行くか、どれだけ生きるのか、どんな苦労があるのか、どんな楽しみがあるのか、気にすることではないということです。

実際にペテロとヨハネのその後の人生は違ったものとなりましたが、しかしそれぞれに主の導きがあり、主の祝福があり、イエス様に導かれる人生を全うするものとなりました。ペテロは教会のリーダーとなり、殉教をいたしました。ヨハネは長寿を全うし、福音書や黙示録を書き残しました。主に導かれる者のそれぞれの人生があります。

今日は洗礼式ですが、私自身の洗礼を思い返してみますと、その準備の学びのときに人のことを気にしてしまっていたことを思い出します。

「私はイエス様を信じて救われるかもしれないけど、私の友達はどうなるのだろうか、イエス様を知らないあの人はどうなるのだろうか」、というか「あの人が私よりももしかしたら悪人ではないか、私が悔い改めるより、あの人が悔い改めたほうがいいのではないか」と、自分のことよりも人のことが気になってしまうのです。

しかし、牧師先生に言われるのです、「今問題なのは、あなたとイエス様の関係であって、他の人のことではないのだ。まずあなたがどうするのかを考えなさい」。他の人とあなたは関係がないのだと教えられたのです。

洗礼を受けてからも、他の人のことが気になるということがあるのではないかと思います。「あの人の信仰生活はどうなんだ」とか、「教会に通っていないあの人がなんだか楽しそうに見える」とかです。

イエス様はペテロに言われたように、私たちにも言われます。

「あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい」

私たちが気にすべきことは、私とイエス様との関係性であり、私がイエス様に導かれていること、私がイエス様に愛されていること、私がイエス様に従っているかどうか、私がイエス様を愛しているかどうかなのです。

「あなたは、私を愛しますか」とイエス様に問われて、私たちはイエス様にまっすぐに目を向けて、「はい。私はあなたを愛します」と答える者でありたいと思います。

私たちが求めるべきものは、他人と比較して自分が優れているということではなく、この世の祝福でもなく、無力な私にそそがれるイエス様の大きな愛を受け取り、その愛によって生かされる人生を、最期まで生き続けるということなのです。

「あなたは、わたしに従いなさい」

イエス様に従う人生、イエス様によって生かされる人生を、今ここから始めたいと思います。